



オルガヤ

38編の端書きに「ダビデの詩。記念。」とあります。「記念」とはメント・モリではないでしょうか。これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。(ルカ22:19) と言われ、パンを裂き、弟子たちに分け与えられた主イエスの言葉を思い出します。

ダビデは部下ウリヤの妻バト・シェバとの関係により、ウリヤを裏切って死なせ、生まれた男児の夭折、また、反逆した三男アブサロム of 戦死を悲痛な思いで味わっています。彼らの死は、王としての権威のなさ、父親としての自覚のなさから生じた悲劇と言えます。彼らの死をダビデは自らの罪の結果として、また、ダビデへの裁きであると受け止め、彼らの死を記念して、この詩を歌わずにいられなかったのでしょうか。

あなたの矢はわたしを射抜き／御手はわたしを押さえつけています。わたしの肉にはまともなところもありません／あなたが激しく憤られたからです。骨にも安らぎがありません／わたしが過ちを犯したからです。わたしの罪悪は頭を越えるほどになり／耐え難い重荷となっています(38:3) と、罪を告白し、罪の大きさに

苦しみ、神に告白しています。詩人は愚かな罪の傷が悪臭を放ち、身も心もうなだれ、嘆きつつ歩く、否、立てないほどボロボロになったと言います。耳も聞こえず、口も開けない、と弁明できない者であることを知っています。そして、わたしは自分の罪悪を言い表そうとして／犯した過ちのゆえに苦悩しています(38:19) と神の前に立つのです。もちろん、この機に乗じて、詩人を攻撃し、陥れようとする敵はいます。罪から解放されなければ、二進も三進も行かないでしょう。主よ、わたしを見捨てないでください。わたしの神よ、遠く離れないでください。わたしの救い、わたしの主よ／すぐにわたしを助けてください。(38:22) と、赦しと助けと救いを求めています。51編もそうですが、ダビデは常に無垢、素直、正直に、神の前に立つ人物です。そのゆえに、家臣、民から愛されるのでしょう。38編ほど赤裸々に、自分の罪を悔いる詩はありません。「讚美歌21」には関連する讚美歌はありません。私は441「信仰をもて」を歌いたいと思います。参考までに [https://www.youtube.com/watch?v=p1Go69\\_ID\\_o](https://www.youtube.com/watch?v=p1Go69_ID_o)

39編の端書きにダビデの詩とあるのに、「エドンの詩」という言葉もあります。エドンについては、その子らゲダルヤ、ツェリ、エシャヤ、シムイ、ハシャブヤ、マティヤの六人。豎琴を奏でながら預言して主に感謝し、賛美をささげた父エドンの指示に彼らは従った(歴代上 25:3) の箇所から、豎琴の奏楽者による演奏がついた賛歌ではないかと思われます。内容は38編の続編のように響きます。詩人は舌で過ちを犯さないようにと、口を閉ざしてきましたが、心は内に熱し、呻いて火と燃えた(39:4) と心の内を明かしています。詩人は言葉の人なのです。神に呼びかけ、神の御心を聞くのです。詩人は人間の世界ではひとかどの人物となっているように見えるし、また、様々な欲望をかなえてきた人間であるが、と、自分のこれまでの人生を振り返ります。けれども、今、神に背いたすべての罪のゆえに、神に責められる時、その人生は無に等しいと感じてしまうのです。御覧ください、与えられたこの生涯は／僅か、手の幅ほどのもの。御前には、この人生も無に等しいのです。ああ、人は確かに立っているようでも／すべて空しいもの。〔セラ ああ、人はただ影のように移ろうもの。ああ、人は空しくあくせくし／だれの手にも渡るとも知らずに積み上げる。(39:6) と、打ちひしがれています。詩人にとって神から離れた生は、陰のようで、空しいと実感しています。命の短さを予感しつつ、残りの日々を主に身を寄せて行きたいと願っています。主よ、わたしの祈りを聞き／助けを求め叫びに耳を傾けてください。わたしの涙に沈黙していないでください。わたしは御もとに身を寄せる者／先祖と同じ宿り人。あなたの目をわたしからそらせ／立ち直らせてください／わたしが去り、失われる前に。(39:13) 「讚美歌21」は495「しずけき祈りの」を関連づけています。

参照 <https://www.youtube.com/watch?v=SoQ1J5wX7bE>